

人間教育を視点にした幼・保・小の連携

Cooperation with a kindergarten, the nursery school and the elementary school on a view point of Humanistic Education

奈良学園大学人間教育学部

中田 正浩

NAKADA Masahiro

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：修学前施設，小1 プロブレム，段差，交流活動，教職員の相互理解

Abstract : The education that I accepted for a stage of the development of each infant child student is practiced at the garden each school. However, when I enter a school of higher grade when I catch the development of the child for a long term when one child is from in front of attendance at school facilities such as a kindergarten or the nursery school to the elementary school and the elementary school to a junior high school, there are a difference of the size of a class and the group of the school year, the difference of the way of the life, the difference of the instruction method, and it is pointed out that I often feel a step without being able to have a connection through the cancellation of the front row problem. In addition, at the teacher interval, actions of personnel affairs interchange and the joint training begin.

In a kindergarten, the nursery school and the elementary school, I am going to plan smooth connection through the interchange and the joint training begin.

It shares each garden and problem of the child for the school stage again to build the system understanding each other's education, and, with a characteristic of the education of each school stage in mind, it does it, and, through cooperation, it is important to plan smooth connection. I consider the way of the cooperation of that purpose through practice.

Keyword : Facilities before study, Small 1 problem, Step, I work on interchange, Mutual understanding of the staff of a school

第1章 なめらかな接続を考える ～幼・保から小学校へ～

1. 子どもが感じる多様な段差

小学校へ入学する子どもにとって、何が段差となるのだろうか。小学校一年生の子どもの様子や日常の声などを集めると次のような段差を子どもが感じていることがわかる。

を中心とした生活

- ② 教師の子どもに対する声かけや支援の仕方の違い
- ③ 柔軟な生活時間と細かく区切られた学習時間
- ④ 遊びや生活への配慮がされた環境と学びへの配慮を中心とした環境
- ⑤ 友達や教職員などとの人間関係や人的環境の違い
- ⑥ 施設の広さや大きさ、掲示、色使いなどの違い
- ⑦ 最年長の学年から最小学年になることの戸惑い

① 総合的な遊びを中心とした生活と各教科等の学び

このように子どもが感じる段差には、それぞれの教

育課程の特色からくる教育内容や方法に関わるもの、学習環境や学校全体の環境に関するものなど、実際にさまざまなものがある。

次に、この中で意味のある必要な段差は何なのか、また、縮めることのできる段差はどれなのかを見極めることが大切になる。

教育課程の内容による段差は発達に応じた教育を推進する意味から必要なものである。②や③の指導方法、時間、④の活動環境などの違いも、教育内容の違いからくる段差であるが、これについても効果的な接続を図ることができる。いわば、段差を解消するのではなく、必要な段差を生かしながら、指導方法や学習環境の面で配慮し、その落差を軽減するのである。

一方、主として、⑤や⑥、⑦などによって子どもが感じる不安や心配などの心理的な段差もある。その段差については、子どもが小学校生活への円滑な移行ができ、安心感や新しい生活への期待感を持つことができるように、縮める配慮が大切になる。

2. 連携や交流が縮める段差

心理的な段差を縮める最も有効な配慮は、連携と交流の充実である。例えばこんなことに配慮できそうだ。

- ① 活動や行事などの一部を相互に利点のある形で共同で行う。
- ② 幼児が小学校の施設を使って活動し、環境に慣れ親しむ。
- ③ 掲示物や作品などを幼・保・小が相互に活用し合い、子どもにとっての情報の交流を促す。
- ④ 幼・保・小の教師が相互の教育活動に加わり、大人の交流を図る。
- ⑤ 幼・保・小を取り巻く地域の人のネットワークを生かす。

これらの中には、教育課程を支える環境としてのいわゆる「隠れたカリキュラム」もある。それを具体化するためには、教師同士が相互に発信し合い、受け止め、そしてアイデアを提供しあう連携の充実が欠かせない。

ここで、交流と連携の使い分けをしていることを念頭において欲しい。

交流とは「違った系統のものが互いに入り混じること。

また、入り混じらせること」である。一方、連携とは、「同じ目的を持つものが互いに連絡を取り、協力し合って物事を行うこと」である。したがって、交流と言う場合は、互いが異なった教育目標を持ち、互いに入り混じることによってそれぞれの目標がより達成されるということをおねらうということになる。連携と言う場合は、子どもの発達段階等のために教育目標が異なるということがあるが、子どもが学ぶ事に関してはその系統性の中できちんと位置づけられていることが前提となる。つまりレベルの違いはあるとしても、教育目標は同じであり、互いが十分に理解していることが求められる。

3. 多様な接続の視点をもつ

このように段差の意味を受け止めた時、次に問題になるのが、その効果的な接続をどうするかという問題である。接続とは、教育課程や指導方法などに関わって関連を図ることであり、連続性や一貫性をもたせることでもある。そのために、次の視点での努力を大切にしたい。

(1) 「遊び」から「学び」への意識を連続させる

まず、幼児の「主体的な遊び」から小学校段階の「体験的な学び」へと、子どもの意識の連続性を軸にして理解することである。

幼児は、砂場でトンネルを掘ったり、川に橋を架けたりして夢中になって遊ぶ。このときに、幼児は、水の量と砂の固さの関係や調節の仕方、掘り方などを、「どれくらいの硬さにして、どれくらいの力で掘ればよいか」というように理論的に思考するのではなく、感覚的に体得している。この感覚が、やがて科学的なものの見方や考え方の基盤となっていく。幼児が夢中になって遊ぶ中では、このような感覚的な遊びの機会が多い。

教師は、幼児が経験している内容＝学びが、今後どのような力につながっていくのか、学びの連続性を考えて援助する必要がある。つまり、幼児の遊びすべてが学びであるというように漠然と受け止めるのではなく、どのような学びの内容を含んでいるのかを見極め、一人一人が学びを積み重ねている経過を把握して、望ましい方向に発達を促すよう援助し、小学校教育への円滑な接続につなげていきたい。また、小学校では、幼児の学びの芽を積極的に受け止め、幼稚園での指導

の工夫や配慮を知った上で、生活科だけでなく、さまざまな教科で、子どもの意識の連続性を大切にしたい授業づくりへの努力がいつそう求められることになる。

(2) 共通の視点で子どもの道徳性を育む

幼児期における心の教育の重要性はいうまでもない。小学校以降の道徳教育との関連からも、幼・保・小の接続を図るために、まず、子どもの心の成長や子育てにおける課題を共通理解することから始まる。さらに、それぞれの道徳教育のねらいと重点、指導上の特色や違いをつかむようにする。

指導に当たって、幼・保では、遊びなどでの人や物と自分とのかかわりの中で、問題や葛藤を乗り越えようとする子どもに正対することなどによって道徳性を育むことが大切にされる。さらに、一日の振り返りなどの生活の節目となる話し合いや、絵本などの読み聞かせによる感情移入の力、夢や憧れを高めることなどによって、道徳性を育む指導をいつそう充実させることもできる。

小学校では、それを引き継ぎ、週一時間の道徳の時間の計画的、発展的な指導を要としながらも、同様に全教育活動の中で道徳性を育てていく。

(3) 文字や数字などへの知的興味を高める

子どもは知的な好奇心を高め、新しい世界に次々と目を開いていく底知れない力をもっている。ある幼児は、目にするアルファベットに興味を持ち、平仮名や数字以前にそれを見まねで写して楽しんでいた。そのような内発的な意欲こそが学ぶ原動力となることを忘れてはならない。例えば、カレンダー、値段表、グループの番号など、数字に触れる環境を用意しておくことで、幼児は数への関心を広げていく。他の文字や記号も同じである。そのような「仕掛け」をつくるのは教師の大切な役割である。

ところが、小学校の教師の中には、「幼稚園や保育所で読み書きを教えないで欲しい。悪い癖をつけてしまう子どもがいて困る」などという声がある。それは、小学校から何もかもはじめるという「教え込み」中心の発想でしかない。むしろ、まったく白紙の状態で小学校に入学し、多くの文字を覚えなくてはいけないところ、子どもにとって大きな段差になるのだと考えなくてはならない。

(4) 集団活動での発展的なつながりを作る

小学校でも当番活動や特別活動での係活動などがあるように、幼稚園や保育所でもさまざまな当番や係などが行われている。しばしば「一人一係」などとして、例えば「でんき係」「まどしめ係」などを置くが、幼稚園での役割分担活動の工夫から退化していると感じることもある。幼児の活動する力や工夫する力を知らないからである。当番や係などが継続的に発展していくようにするために、相互の姿を見合うことが大切である。園の行事や学校行事についても同様である。例えば、劇の発表会や運動会、遠足など、内容が継続し、発展する行事については連携し、年間に計画的に配置することで不必要な繰り返しを避け、発展的な内容として接続を効果的に図ることができる。

第2章「連携」と「交流」の実践について

1. 交流から連携になるために

幼稚園・保育所から、または小学校からの要望で一方的に交流するのではなく幼児児童がともに楽しみ、ともに学ぶことができる交流になることが連携への一歩である。行事があるから、毎年やっているから今年も行おうといったイベント的な交流ではなく、そのことを通して何をねらうのか、どんな経験をさせたいのかをしっかりと考えることが大切である。「〇〇ちゃんと遊んだ」「またあの子と遊びたい、世話をしたい」という心に残るかかわりがもてるようにしたいものである。

(1) 園児と1年生の交流活動

交流活動の中でも園児と1年生との交流活動は、接続しあうということもあり、学びの連続性という観点からも一番多く見られる形である。

生活科での大型カルタ取り、ゲーム体験、ドッジボール大会などは、楽しみながら親しみを深める機会である。また、国語や算数などの学習見学では、本格的な小学校授業に積極的に参加している先輩の姿をあげがれをもって見つめている。1年生もそんな自分たちを誇らしく感じ、自分自身の成長を認識できる機会となっている。そうやって行くには、教師間で事前の打ち合わせが必要である。それを受けて、子どもたち自身が事前の学習をすることが大切である。幼児なりに、または、小学生なりに課題意識を持って参加できる交

流でありたい。

次に挙げるのは、K幼稚園・A保育園とK小学校の交流と連携の実践記録抜粋である。

「緑地公園のクヌギ林で遊ぼう」

日 時 10月16日 10:00～11:15

場 所 緑地公園・クヌギ林

参加者 幼稚園児 4歳児 29名 5歳児 34名

保育園児 5歳児 26名 小学生 63名

ねらい

ア 秋の自然の中で、小学生や友達といっしょにいろいろな遊びを楽しむ。

イ 互いに思いを伝え合い、親しみをもって遊ぶ。

指導案

予想される活動	子どもに対する願い <input type="checkbox"/> 共通 <input type="checkbox"/> 幼児 <input checked="" type="checkbox"/> 小学生	準備物
<p>○クヌギ林の広場で会う。</p> <p>○挨拶をする。</p> <p>・1年生の児童が挨拶をする。</p> <p>○今日の活動について話し合う。</p> <p>○グループに分かれる。</p> <p>・1年生から名札をつけてもらう。</p> <p>○グループで遊びたいことを話し合う。</p> <p>○グループで遊ぶ。 ドングリ拾い、 鬼ごっこ、 虫取り、探検、 自然物を使って作る、 仲良し遊びなど</p>	<p>○再開を喜ぶ気持ちを持たせたい。</p> <p>■それぞれの役割を果たさせたい。</p> <p>○今日の遊びの方法や約束などを確認し、安全に楽しく遊べるようにしたい。</p> <p>■1年生がリードして、グループに分かれるようにさせたい。</p> <p>○名札をつけながら互いに名前を確認させたい。</p> <p>■あらかじめ遊びを考えておくが、幼児の話を聞いて遊びを決めさせたい。</p> <p><input type="checkbox"/>自分の思いを1年生に伝え、ともに楽しんでほしい。</p> <p>■4歳児でも無理なく活動できるように配慮させる。</p> <p>○困ったことがあれば話し合ったり、近くにいる教師に相談したりなどし、楽しく遊びが続けられるようにしてほしい。</p>	<p>救急用品 ビニールシート</p> <p>接着剤 モール はさみ めうち 画用紙など</p>

実践内容

エピソード ○幼児 ■ 1年生 △活動	子どもの様子
<p>■何して遊びたい？ドングリ拾いする？</p> <p>○ドングリ拾いする！</p> <p>△拾ったドングリや枝などで好きなものを作って遊ぶ。</p> <p>■ドングリのアメちゃん作ったよ。</p> <p>○お姉ちゃん上手やなあ。僕も作りたい。</p> <p>■手伝ってあげようか。</p> <p>■はい、これあげよう。</p> <p>○ありがとう。うれしいな。</p> <p>■それできたら、あっちで遊ぶ？</p> <p>○うん。いっしょに行こう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・製作，虫取り，ドングリ拾いなど，いろいろな遊びをしているが，1年生が幼児に合わせてくれているグループが多い。 ・ドングリや小枝などで人形や飾り物を作っている。発想は1年生も幼児も良く似ているが，接着や細かい工夫などは1年生が優れている。 ・幼児は真似をしながら，時には手伝ってもらいながら，自分の思いを実現しようと頑張っている。

事後学習

<ul style="list-style-type: none"> ・いっしょに活動したことを振り返り感じたことを話し合う。 ・各園で友達と協力しながら，クヌギ林での遊びを再現し，楽しんだり工夫して作ったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を振り返り，楽しかったこと，困ったこと，次回への思いについて話し合う。 ・作ったものでもう一度遊んだり，次回に向けて修正を加えたりする。 ・いっしょに遊んだ幼児に手紙を書く。
---	--

(2) 園児と2年生の交流活動

園児と2年生とは生活科・図工科を通して交流している。「ワクワクランドで遊ぼう」というテーマで，2年生が創りあげた遊びの場に園児を招待した。招待状を手渡したり，遊び方を説明したりして，園児が楽しく活動できるように心を配った。2年生が園児に優しく語りかけてくれるほほえましい光景が随所で見受けられ，お兄さんお姉さんらしさを存分に発揮している。少し年の離れた関係のほうがより効果的にコミュニケーションがとれ，交流の様子もスムーズである。

(3) 園児と5年生の交流活動

園児と5年生交流するということは，園児が小学校

へ入学した時，最上級生として迎えてくれるということである。最上級生と顔見知りになることによって入学への不安を打ち消し，期待を高めるというねらいがある。

5年生は総合的学習の時間を活用し，年間70～56時間をかけて交流しあった。この交流に関しては小学校側からの積極的な申し出で始まったものである。最初に年長児が小学校に招待された。広い校庭で，アスレチックや砂場，なわとび場など普段経験できない遊び場でグループごとに遊んだ。5年生は一言一言でいねいに語りかけ，園児の思いをつかもうと懸命にかかわってくれる。ともすれば，照れたり，ふざけたりし

がちな学年であるが、事前の教師の課題意識の持たせ方（自分の弟や妹に接する時の経験を話し合ったり、5歳児の気持ちを考えようという投げ掛けがあったりした）が、良かったためであろう。その後、5年生が得意なものを披露してくれた。5～6段の跳び箱を跳ぶ姿、一輪車を乗りこなす姿、剣玉を器用に操る姿などに自分たちの遊びより数段高いレベルを見せてもらい、あこがれと強い刺激をもらった。

次は、幼稚園に5年生が来てくれて交流した。5年生がまず下見に来て、園児たちと活動する内容について幼稚園教諭と打ち合わせをする。手作りの人形劇、ゲーム、絵本読み、サッカー、漫才などである。打ち合わせでわからなかったことは、電話で問い合わせるなど、5年生が起案したことを幼稚園でも大事に受け止め、できるだけの援助をした。ペアのグループとして顔見知りになり、親近感が出てくるようになる。

2学期は幼稚園の「作って遊ぼう」という製作活動に5年生が手伝いにやってきて共に行動した。例えば「おけけ屋敷」を作っているグループでは、怖い雰囲気を出すために部屋を真っ暗にしたいという思いをもった。しかし、園児の力やアイデアでは、うまくできない。5年生は、園児の思いをじっくりと聞きながら「ダンボールはどう？」とか、「ビニール袋でもできるよ」というように園児に選択させて、その選択を大事にしながらかしいところを手伝うようにしてくれた。園児に成就感を持たせるような関わり方をしてくれたのである。グループでの話し合いも5年生がうまくリードしてくれて、4歳児も5歳児もそれぞれに自分の思いを出すことができた。

3学期は学校探検で、再び小学校を訪れた。ありきたりの探検ではなく、園児のグループに案内係の5年生がついてくれる。園児の行きたい場所に行かせてくれて、行った先では5年生が待機していて、カードに判を押してくれる。

音楽室であれば合奏をしてくれたり、図書室では絵本を読んでくれたりなど、行った先々に楽しい仕掛けがある。1年生の教室ではランドセルを背負わせてくれたり、算数の模擬授業をしてくれたりと、園児が学校生活に期待感を膨らませられるよう考えてくれたものであった。5年生の企画力に驚きつつも、子どもを信頼して、主体的に行動させようとした5年生の教師集団の素晴らしさや交流・連携に対する意識の高さに感

動した。また、5年生も自分たちの立場を自覚し役割を果たす中で、最上級生への意識を高めていく活動となったのである。

どこでもできるという反面、心が通わなければ形だけになってしまう交流・連携である。教師自身、気持ちを込めて取り組みたい活動である。

第3章 教職員の相互理解

目標を共有し、園児・児童の交流活動を共有する小学校職員・幼稚園・保育所職員は、必然的にお互いの職種と立場を理解しあう立場に置かれる。そしてそれは、目の前の子どもたちを通した直接的・実地的な相互理解の場としての〈幼・保・小連絡会〉あるいは〈幼・保・小合同授業研究会〉という形で深められている。

〈幼・保・小連絡会〉は、それぞれの教育活動の理解を確かなものにしながら、一人一人の園児・児童について同じ目線で継続して語り合う連携づくりをねらって開催されている。

年度末には新入学児童についての情報交換を行い、入学への移行をスムーズに行っている。年度始めには実際に授業の様子を参観しながら、個々の児童についての理解を深めている。交流活動のある関係学年とは個別の連絡会を開催して、互いの活動のねらいと内容を確認しながら進めている。

〈幼・保・小合同授業研究会〉では、1年生の児童を幼稚園教諭が指導するといったものや、その逆の場合もある。こうして互いの指導法を共有することで事後研究会では、幼・保・小それぞれの学びについて活発な意見交換がなされる。共通して捉えられる部分と年齢差や学習環境から相違する部分を明らかにしながらも、就学前教育での「遊びを通した学び」から小学校1年生の「学習」にどうつなげていくかを協議し、相互の保育や授業の改善に役立て、実践に生かしている。

1. 交流・連携の困難点

これまで述べてきた就学前教育と小学校教育との連携協力活動を積極的に進めている幼・保・小は数少ないのが現実である。では、十分に進展しないのはどうしてであろうか。

第一に、幼・保・小の連携を進めるその主体が、幼稚園・保育所であるのか、小学校であるのか明らかで

ないこと。連携を進める主体は本来小学校であるべきだと考えられるが、小学校において、その必要性が十分認識されていない現実がある。

第二に、幼・保・小の連携協力の必要性を認識していても、連携を推進するための具体的な内容・方法が十分開発されていないこと。とりわけ、就学前と小学校の連続性を考えた教育課程の研究はほとんどなされておらず、幼・保・小がそれぞれ完結したものとする教職員の意識は根強い。

第三に、小学校には、公立・私立の複数の幼稚園・保育所から就学するため、就学するすべての幼稚園・保育所と連携協力することは現実的に無理があること。小学校入学後、一年生の担任が幼稚園の教員と入学した児童についての情報交換することや、一部課題のある児童についての情報を得るために在籍していた幼稚園・保育所と協議する程度が一般的である。

第四に、幼稚園が併設されている小学校はそれほど多くなく、就学前の幼児が小学校に来るということは皆無に等しいこと。おそらく、幼稚園が併設されていない小学校の場合、11月前後に実施される就学時健康診断で、4月に入学する園児と、小学校の校長、教職員、一部の児童とが始めて接するのが一般的である。

ところで、前述した幼・保・小連携の事例は、公立幼稚園が、近隣の保育園と小学校に交流を働きかけて、比較的うまくいった事例である。

ややもすると、連携協力といいながら、一方的で、どちらか一方だけが意味を持つ活動になりがちである。そうならないために、どうすればよいか、具体的方策を次に述べたい。

2. 交流・連携を進めるために

連携を進めるためには、まずは、幼稚園側から積極的に働きかけていくようにしたい。

具体的には、小学校の情報（学校の特色、小学校の教育活動、児童の実態等）を幼稚園、幼稚園の保護者に提供してもらうこと、幼稚園の諸活動に小学校の児童の積極的参加を要請すること、小学校の生活科学習をはじめ、総合的な学習の時間での活動に幼稚園としてのかかわりの可能性について検討すること、小学校低学年の児童の様子について、定期的に小学校と幼稚園の教員が協議する場を持つことなどが考えられる。

第二に、地域・保護者に開かれた学校づくり、園づ

くりの推進を小学校と幼稚園が協力しながら進めることである。現在、どの幼稚園、小学校でも開かれた幼稚園、小学校として、保育や授業の公開をはじめ、諸行事への地域保護者の参画など、種々の活動を行っている。地域の幼稚園、小学校としての特色を生かし、日程や内容を協議しながら、協力して開かれた園、学校を推進することが必要である。また、地域の行事への園児、児童の共同参加や、園行事や学校行事への相互参加など、幼稚園と小学校の垣根を低くする試みが大切である。このようなことを通して、園児・児童を園、学校、地域、保護者がともに育てるという意識を醸成することになる。

第三に、幼稚園と小学校のPTAや保護者の会に働きかけて、子育てに関する相談のネットワークを幼稚園から小学校へと広げることである。少子化に伴い、子育てに対する保護者の不安や悩みが増えており、どの幼稚園でもそうした保護者の不安や悩みに教員が直接相談にのったり、話し合いの場を設けたりしている。こうした不安や悩みは小学校においても同じである。小学校のPTAでよく実施されている家庭教育学級を幼稚園まで広げたりして、幼稚園、小学校の保護者の連携を進め、子育てについて幼稚園・小学校でそれぞれなされている相談体制を拡大しながら、一人一人の子どもをトータルで指導援助する仕組みを創りあげることが必要であると思われる。

地域の幼稚園・小学校としての特色を生かし、また、それぞれの実態に即し、できることから連携協力の活動を積み重ねていくことが大切である。

3. その他の交流について

ここでは、幼・保・小の交流・連携について述べたが、これ以外にも多様な交流・連携がある。

例えば、幼稚園と幼稚園間で、幼稚園と保育所で、幼稚園と中学校で、幼稚園と高校で、幼稚園と地域で、などいろいろな交流・連携の仕方がある。

今なぜ交流や連携の必要性が叫ばれるのか。それは、子どもを取り巻く生活環境が核家族化、少子化などの影響により、著しく変化し、特に人とのかかわりが希薄になり、人の優しさを感じ、温かい心のふれあいを持てる場が少なくなってきたからである。

幼児期や児童期は、自分の思いを表現し、人との関わりやつながりの中から自分を見つめたり、相手を受

け入れたりしていく力の基盤が培われていく時期である。この時期こそ、さまざまな人との関わりを積極的に行い、人の優しさに触れ、信頼感や思いやりの心が伝わる体験を重ねなければならない。そのような体験をすることで、人と関わることの楽しさを知り、身近な人に愛情や信頼感を持てるようになる。だからといって、交流すればこれらの力がつくというのではなく、如何に出会わせるかが必要である。教師自身がさまざまな人との出会いをコーディネートしていく力をつけることが重要である。

4. コーディネート力をつけるために

- 相手側の実情を知り、学び、理解して、相手と交流しようという姿勢を持つこと
- 交流における互いの目的を共通理解し合ったり、交流に必要な的確な情報を伝え合ったりすること
- 相手のもつ力を子どもたちに注いでもらえるように、環境を整えたり、工夫したりして、十分な準備をすること
- 実際の交流の場面では、相互が力を出せるように臨機応変に環境を変えたり、目立たぬように援助したりして、柔軟性のある対応をすること

交流・連携を通して育ち合える関係をつくるのは、教師の大切な役目である。コーディネート力を生かしているいろいろな人と響き合ってほしい。

〈引用・参考文献〉

1. 幼稚園教育大全 第7巻 全国国公立幼稚園長会 2007
2. 研究集録 24号～29号 堺市立幼稚園教育研究会 2001～2007
3. 初等教育資料 1月号 東洋館出版社 2008